

第1章 研究の経緯と方法

第1節 研究の経緯

山王圀遺跡は栗原市一迫に所在する縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺跡であり、縄文時代から弥生時代への変遷をたどる上で重要な遺跡として注目されていた。遺跡の研究史については前巻『国史跡山王圀遺跡の研究Ⅰ』で述べているので本章では、対象資料に関わる部分についてのみ触れる。旧一迫町（現・栗原市）が計画した小学校体育館の建設に伴い、発掘調査が必要となったことから、町が東北大学に協力を依頼し、1965年に発掘調査が実施された。調査では縄文時代晩期の漆器類などの有機質遺物が多量に出土し、当該期の物質文化の解明に期待が寄せられた。

発掘調査の終了後、町は引き続き東北大学に出土品の整理に関する協力を求め、東北大学によって有機質遺物を含む膨大な出土資料の整理・分析が進められた。その後、概報、図録の刊行等によって主な資料の公開を行ってきたが、本報告書については未刊行である。

弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター（以下センター）は、北日本の縄文時代から弥生時代にかけての低湿地遺跡を研究対象とし、山王圀遺跡でも出土している有機質遺物の資料分析や保存処理に関する体制を整え、非破壊による資料分析を行って成果を上げてきた。センターは、研究の目的や方向性に照らし合わせ、希少な有機質遺物やそれらが層位的な出土条件を有する点などから山王圀遺跡の出土資料の調査が研究進展のために必要として、栗原市教育委員会に山王圀遺跡出土漆器に関する共同研究の実施を提案した。2015年度に弘前大学人文社会科学部（当時：人文学部）と栗原市教育委員会は覚書を取り交わし、これに基づいて山王圀遺跡から出土した櫛や籠、装飾品などの漆器類の調査と保存が進められることとなった。あわせて、1965年に発掘調査を実施してこれまで資料整理を担ってきた東北大学に協力を打診し、その協力のもと、山王圀遺跡出土品の全容の解明に向けてこれまでの資料整理状況の確認に着手した。

覚書による山王圀遺跡出土漆器の調査と保存に関する共同研究は2015年度から2019年度までの5か年計画で実施され、2020年3月に報告書『国史跡 山王圀遺跡の研究Ⅰ 漆器編』が刊行された。この5ヶ年の共同研究により、山王圀遺跡出土の漆器類について分析機器等による解析が行われ、画像を使った具体的な製作技法の解明や、保存処理によって脆弱資料の状態が安定化し展示活用が可能になるなどの大きな成果を上げた。この成果をさらに活かすため、今回調査が行われた漆器類と同時期の遺物である土器や石器など他の出土品についても調査分析が望まれるところであり、山王圀遺跡出土品の全体像を明らかにするための更なる共同調査・研究が進められることとなった。そこで、漆製品だけでなくより発展的かつ総合的な分析を実施するために、2020年度より5ヶ年計画で弘前大学人文社会科学部と栗原市教育委員会との間に新たな共同研究「山王圀遺跡出土資料の研究協力に関する協定」を2020年12月に締結した。体制は以下である。

総括・土器分析担当 関根達人（弘前大学人文社会科学部 教授）

石器ほか遺物分析担当【本書担当】 上條信彦（弘前大学人文社会科学部 教授・センター長）

自然科学的分析・保存処理担当 片岡太郎（弘前大学人文社会科学部 専任講師）

動物遺体の同定 櫻庭陸央（人文社会科学研究科大学院生）、植月 学（帝京大学 文化財研究所 准教授）

遺物の実測 木村隼士・畑内優貴也・阿部智也・清水小春・福井麻里・下川弘喜・渡邊瑛彦・相馬玲奈・稲見ののか・沢畑瑞季・三河茉依・石岡ちひろ・山本ひなた・石川万優子・廻立泰

成・山口沙織・三和春香・萩井健太・浅野 溪・田中祥幹・菅原昌彦・森川友萌・遠藤光新・算用子眞充・石戸谷龍生・谷 勇樹・大平紋寧・葛西真生・岩瀬小夜・大山美樹（以上、人文社会科学部学部生・当時）・早川太陽・杉山一樹・櫻庭陸央（以上、人文科学研究科大学院生・当時）

遺物のトレース 上記学生

遺物の撮影 上條信彦・山本ひなた

版組 上條信彦

巻頭写真撮影 小川忠博

共同研究機関および情報提供 栗原市教育委員会、大場亜弥

研究協力者 須藤 隆（東北大学名誉教授）

阿子島香・鹿又喜隆（東北大学大学院文学研究科、2020 年当時）

第2節 分析の方法

栗原市一迫埋蔵文化財センター（山王ろまん館）には、東北大学から返却された資料が保管されている。資料は遺物・図面・写真類がある。遺物のほとんどは東北大学調査の際に整理されたままの木製ケースに収められていた。土製品の一部はガラス製のシャーレに入れられていた。

（1）整理と掲載順

整理作業では、遺物の注記と栗原市教育委員会提供の遺物台帳ならびに写真を参照しながら、出土地区と層位の情報を照合した。また、過去の図面や対象資料を扱った東北大学学生 2 名の卒業論文データを借用して電子データ化するとともに、35 mm 及び 6×6 白黒フィルム、35 mm 及び 6×6 ネガカラー、35 mm リバーサルフィルムについては栗原市教育委員会によってスキャニングされた。本報告掲載時にはフォトショップ（Adobe 社製）により、画像のトリミング、劣化画像の鮮明化作業を行った。

遺物注記には調査当時の遺物台帳に対応する Ornament の略記号 O あるいは Stone の略記号 S を冠記号とする遺物番号 S-1・2…が付されたものと、区・層位のみが付された台帳外の資料がある。さらに、遺物番号がなく台帳との照合ができなかった出土位置不明を加えた計 3 種類がある。なお遺物番号は当初付されていたものが劣化などにより読み取れなかった場合がある。これらを統一するために整理番号として通し番号（弘大番号）を付けた。ただし、後に同一個体と判明したものや、接合などにより、欠番となったものもある。日付なども頼りにできるだけ区・層位を推定した。最終的に 9 割以上の地区、グリッド、層位が特定できた。さらに調査から 50 年以上経ち、遺物のなかには劣化や変形、破損などで取り扱いが難しいもの、発掘後の遺物の移動、抽出などによって出土位置の判断が難しいもの、過去の図や写真にあっても実物がないものがあり、その資料を検索した。上記理由によって整理・照合作業は一般的な発掘資料の整理作業に比べて予想以上の時間を要することになった。

本書を作成するにあたって、石器は層位的な出土状況を重視し、台帳番号が判明するものを東区、西区の層序順で掲載した。土製品、石製品、骨角器は分類順に掲載した。

（2）実測・トレースおよび撮影

実測は考古学実習、卒業研究作成、修士論文作成の一環として実施した。一般的な方法を採用した。そのほか、骨角器など小型かつ脆弱な資料については、撮影画像からオルソ画像を作成し、これを用いて外形や断面図をデジタルトレースした。トレースはイラストレータ（Adobe 社製）を用いた。作業は

2018～2020年度に行った。

撮影は2020年度に主に上條と山本が行った。機材はCanon EOS 90Dを用い、約2,000万画素で撮影した。デジタルカメラのデータは、タイトルを付けてハードディスクに収納した。

第3節 遺物の保存処理

漆塗の骨角器・貝製品は片岡太郎により保存処理が実施された。保存処理の詳細は2020年刊行『国史跡 山王圀遺跡の研究Ⅰ 漆器編』による。

第4節 研究成果の公表

分析成果は2017年度弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター企画展で公開・展示を行った。

2017年度弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター企画展『大山王圀展』（弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター展示室、2017年10月7日～2017年11月12日）見学者数のべ約1,500名

○卒業研究

2016・17年度の卒業研究で3名、2020年度修士論文で1名が本資料を用いたテーマで研究を行い、教育面でも一定の効果を果たした。

木村隼士「縄文時代晩期後半から弥生時代における石製品の変化―宮城県山王圀遺跡を例に―」

畑内優貴也「東北地方の縄文晩期の土製玉類について」

渡邊瑛彦「縄文晩期における土製装飾品の研究―山王圀遺跡出土の土玉・耳栓を中心に―」

早川太陽「東北地方縄文時代晩期から弥生時代前期の生業変化―宮城県山王圀遺跡の石器組成から―」

○修士論文

早川太陽「石器からみた弥生時代の東北地方における水稻農耕定着過程」

東北大学文学部では、本資料を用いた下記の卒業論文が作成され、図の一部を引用した。

伊藤 浩「東北地方における縄文時代晩期の石器研究―宮城県一迫町山王圀遺跡を中心として―」
(1990年度卒業論文)

松田瑞穂「縄文・弥生時代移行期における石器の研究―宮城県一迫町山王圀遺跡出土石器の分析を中心として―」(1999年度卒業論文)

(上條信彦)